実施年月日
5. 2. 4
富山大学

令和５年度　富山大学大学院人文社会芸術総合研究科

人文社会芸術総合専攻（修士課程）人文・芸術プログラム　芸術文化学系

一般入試・社会人入試・外国人留学生入試

入学試験問題

小　論　文

注意事項

１．試験開始の合図があるまで，この試験問題を開いてはいけません。

２．問題用紙（本文）は３枚，解答用紙は１枚，下書用紙は１枚あります。問題用紙および解答用紙に不備があった場合は，手を挙げて監督者に知らせてください。

３．解答は，すべて解答用紙に記入してください。

４．受験番号は，解答用紙の指定欄に算用数字で記入してください。

５．試験終了後，問題用紙および下書用紙は，持ち帰ってください。

次の文章を読んで，後の問に答えなさい。

二〇世紀の資本主義の特徴の一つは、文化産業と呼ばれる領域の巨大化にある。二〇世紀の資本主義は新しい経済活動の領域として文化を発見した。

もちろん文化や芸術はそれまでも経済と切り離せないものだった。芸術家だって霞を食って生きているわけではないのだから、貴族から依頼を受けて肖像画を描いたり、曲を作ったりしていた。芸術が経済から特別に独立していたということはない。

けれども二〇世紀には、広く文化という領域が大衆に向かって開かれるとともに、大衆向けの作品を操作的に作り出して大量に消費させ利益を得るという手法が確立された。そうした手法にもとづいて利益をあげる産業を文化産業と呼ぶ。

［中略］

資本主義の全面展開によって、少なくとも先進国の人々は裕福になった。そして暇を得た。だが、暇を得た人々は、その暇をどう使ってよいのか分からない。何が楽しいのか分からない。自分の好きなことが何なのか分からない。

そこに資本主義がつけ込む。文化産業が、既成の楽しみ、産業に都合のよい楽しみを人々に提供する。かつては労働者の労働力が搾取されていると盛んに言われた。いまでは、むしろ労働者の暇が搾取されている。高度情報化社会という言葉が死語となるほどに情報化が進み、インターネットが普及した現在、この暇の搾取は資本主義を牽引する大きな力である。

なぜ暇は搾取されるのだろうか？ それは人が退屈することを嫌うからである。人は暇を得たが、暇を何に使えばよいのか分からない。このままでは暇のなかで退屈してしまう。だから、与えられた楽しみ、準備・用意された快楽に身を委ね、安心を得る。では、どうすればよいのだろうか？ なぜ人は暇のなかで退屈してしまうのだろうか？ そもそも退屈とは何か？

こうして、暇のなかでいかに生きるべきか、退屈とどう向き合うべきかという問いがあらわれる。〈暇と退屈の倫理学〉が問いたいのはこの問いである。

＊

〈暇と退屈の倫理学〉の試みはけっして孤独な試みではない。同じような問いを発した思想家がかつて存在した。時は一九世紀後半。イギリスの社会主義者、ウィリアム・

モリス［1834－1896］がその人だ。

［中略］

一八七九年の講演「民衆の芸術」で、モリスはこんなことを述べている。

革命は夜の盗人のように突然やってくる。私たちが気づかぬうちにやってくる。では、それが実際にやってきて、さらには民衆によって歓迎されたとしよう。そのときに私たちは何をするのか？ これまで人類は痛ましい労働に耐えてきた。ならばそれが変わろうとするとき、日々の労働以外の何に向かうのか？

そう、何に向かうのだろう？ 余裕を得た社会、暇を得た社会でいったい私たちは日々の労働以外のどこに向かっていくのだろう？

モリスは社会主義革命の到来後の社会について考えていた。二〇世紀末、社会主義・共産主義体制は完全に破綻（はたん）したが、それはモリスの問いかけをいささかもおとしめはしない。むしろいまこそ、この問いかけは心に響く。「豊かな社会」を手に入れたいま、私たちは日々の労働以外の何に向かっているのか？ 結局、文化産業が提供してくれた「楽しみ」に向かっているだけではないのか？

＊

モリスはこの問いにこう答えた。

革命が到来すれば、私たちは自由と暇を得る。そのときに大切なのは、その生活をどうやって飾るかだ、と。

なんとすてきな答えだろう。モリスは暇を得た後、その暇な生活を飾ることについて考えるのである。

いまでも消費社会の提供する贅沢品が生活を覆（おお）っていると考える人もいるだろう。「ゆたかな社会」を生きる人間は生活を飾る贅沢品を手に入れた、と。

実はそれこそモリスがなんとかしようとしていた問題であった。モリスは経済発展を続けるイギリス社会にあって、そこに生きる人々の生活がすこしも飾られていないことに強い不満を抱いていたのである。

当時のイギリス社会では産業革命によってもたらされた大量生産品が生活を圧倒していた。どこに行っても同じようなもの、同じようなガラクタ。モリスはそうした製品が民衆の生活を覆うことにガマンならなかった。講演のタイトルになっている「民衆の芸術」とは、芸術を特権階級から解放し、民衆の生活のなかにそれを組み込まねばならないという意志をあらわしたものだ。

つまり、モリスは消費社会が提供するような贅沢とは違う贅沢について考えていたのである。

モリスは実際にアーツ・アンド・クラフツ運動という活動を始める。彼はもともとデザイナーだった。友人たちと会社を興し、生活に根ざした芸術品を提供すること、日常的に用いる品々に芸術的な価値を担わせることを目指したのだった。人々が暇な時間のなかで自分の生活を芸術的に飾ることのできる社会、それこそがモリスの考える「ゆたかな社会」であり、余裕を得た社会に他ならなかったのだ。

モリスが作り出した工芸品は金持ちの嗜好品（しこうひん）になってしまい、すこしも民衆のなかに芸術が入り込むための手伝いにはならなかったという批判もある。この批判は間違ってはいない。だが、モリスの考える方向は私たちに大きなヒントを与えてくれるだろう。

かつてイエスは「人はパンのみにて生きるにあらず」と言った。

吉本隆明はこの言葉を解釈して、人はパンだけで生きるのではないが、しかしパンがなければ生きられないことをイエスは認めたのだと言った。

モリスの思想を発展させれば次のように言えるのではないだろうか。

――人はパンがなければ生きていけない。しかし、パンだけで生きるべきでもない。私たちはパンだけでなく、バラももとめよう。生きることはバラで飾られねばならない。

國分功一郎『暇と退屈の倫理学』増補新版
株式会社太田出版，2015 年，20－28 頁より

問　文中で示された文化産業が提供する「楽しみ」と，モリスが目指した試みはどのような点において異なるのか，またどのような共通点を持つのかを明らかにし，生活と芸術との関わりについて自らの考えを 800 字程度で述べなさい。